

ダンス学習における即興表現 の変化について

—聴覚障害児のダンス学習—

佐分利育代

1. 研究目的

即興表現は、内的リズムと外的リズムを一致させる最初の試みであり、表現の主体が、何をとりこみ何を体験したかの現れである。聴覚障害児においても、ダンスを通しての内的体験外在化の指導は、言語指導とも関わって意義あるものと考えられる。

本研究は、ダンス学習の過程を、享受と表現の媒体としての舞踊運動獲得の過程と考え、初めてダンス学習を経験した聴覚障害児の即興表現が4年間でどのように変化したかを、リズム化の観点から見るものである。

2. 研究方法

①対象

鳥取県立鳥取聾学校中学部女子5名(1982年、1年生3名、2年生2名)

②期間

1979年(小学部4、5年生)～1982年(中学部1、2年生)の4年間

③方法

1979年の学習前と学習後及び各学年の学習の計5回、同一テーマ「木と風」による即興表現を課し、8mmフィルム(24コマ/sec)に収録、主題の動きと、それを構成する運動要因を中心に分析検討する。

④各年度の学習目標

<1979年>いろいろなものの形や動きを全身でとらえられる。

<1980年>いろいろな場面をとらえられ、続けて踊れる。

<1981年>だんだん変化する様子を表現できる。

<1982年>好きな題で作品を創ることができる。

⑤即興表現の分析

図1は学習者A.M.の1回目と5回目の即興表現である。各回、各学習者の即興表現の分析結果は全て図1のように表わし検討した。

表現は下から上に進行する。数字はフレーズ、(付)の数字は主題の動き(モチーフ)を表わす。モチーフを構成する運動は、L.マレイの分類を参考に分析した。㉗～㉙は主に上肢、a～kは上肢以外の動きで、空中の形態に関係する、曲げる伸びる伏す等を、A～Jは移動の運動等で主にフロ

アパターンに影響する運動である。アクセントの部分に、ラバンのアクセントの付号を記した。

3. 研究の結果と考察

5回の即興表現の分析結果のうち、5名に共通の特徴を、全体構成と運動及び表現要因に関してとりあげ、まとめたのが表1である。

1回目の即興表現に比べ2回目では、モチーフの導入、グループ化、類似性と再帰、アクセント、3回目では、持続、流れ等リズムの特性が現われ、4回目、5回目ではさらに内的リズムと外的リズムの一致にむけてこれらの特性の強化が見られた。4回目の表現からは特に、全体の構造化が進み、始めと終わりを持つまとまりができ、動きの内容も複雑化した。これは、「個人の創作は小学校6年で顕著に発達する」との松本らの報告と学年的に一致する。また、運動の内容についてみると、ラバン及びプレストンや、マレイが年令による学習課題として示しているものとはほぼ同じ過程で出現したが、5回目の表現ではさらに、構造化の強化とともに動きの質の探求、すなわち象徴としての舞踊運動の探求が見られた。

以上のように、ダンスの技能をリズム化の観点から見ることによって、その発達がリズムの特性と無関係でないことが確かめられた。そして、今回の研究は聴覚障害児を対象としたものではあるが、これらの結果は、ダンス学習における技能の段階についての一般的な資料の一つとして学習指導の手がかりとなりうると考えられる。

一方、内的リズムの外在化としてのダンスは、聴覚障害児にとって言語表現よりもむしろより直接的な表現であり、学習によって健常者と変らない心的体験が得られること、さらに、言語指導のためのリズム教育が、ひとり音楽の側からのみ行なわれるものでないとの指針をも得られた。

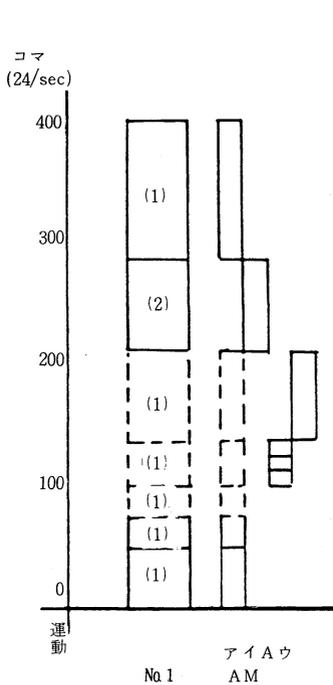
主要参考文献

- M. N. ドウブラー 舞踊学原論 大修館書店 1974
- L. クラーゲス リズムの本質 みすず書房 1971
- ANN HUTCHINSON Labanotation OXFORD 1974
- R. L. マレイ ダンス学習法 大修館書店 1974
- V. プレストン モダンダンスのシステム 大修館書店 1976
- ルドルフ・ラバン 現代の教育舞踊 明治図書 1972
- 松本千代栄他 舞踊の創作鑑賞能力の発達に関する研究 体育学研究第9巻第2号 1965
- 草薙進郎 聴覚障害児の教育 明治図書 1972

表 1 5回の即興表現における舞踊運動の特徴

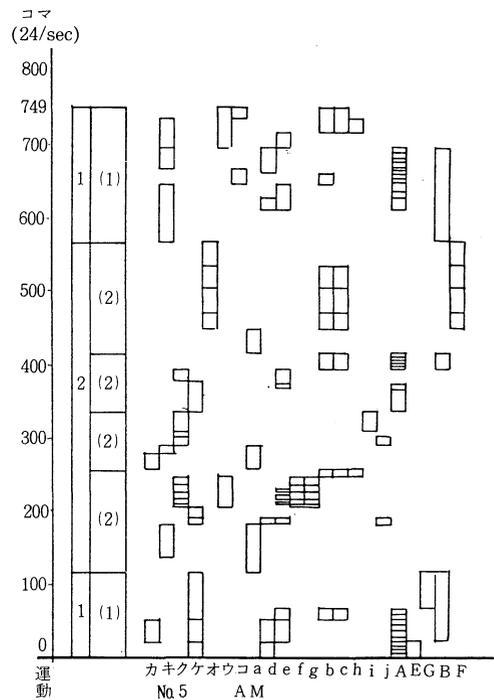
即興表現 撮 影 口	No 1 S. 54. 10. 25	No 2 S. 54. 11. 13	No 3 S. 55. 6. 24	No 4 S. 56. 12. 13	No 5 S. 57. 12. 26
表現時間	0~30秒	8~33秒	38~96秒	20~41秒	14~36秒
全体構成 (構造化)	モチーフらしきもの 断続	モチーフの断片的な出現 断続	モチーフやフレーズの連鎖 的な出現	テーマの明確化 モチーフの統一 始めと終り 持続	テーマの確立 モチーフの深化 ふくらみ 始めと終り 一息の感じの持続
運 動	日常的 単一の運動要素	非日常的 上肢と下肢の運動の関連 加算的運動	非日常的 移動運動の増加 掛け算的運動	非日常的 上肢と胴体の運動の増加 運動要素の量的増加	非日常的 ねじる、波動等全身一体の動き 運動の質的高まり
表 現 要 因	形態性	日常の範囲 前向き	空中の形態の拡大 前、横、後ろ、斜め向き 左方、右方 左右対称	床と空中の形態拡大 向き、方向に明確な意味 左右対称	テーマによる方向や形の統一 非対称
	時間性	同じ速さや長さ 繰り返しができない 繰り返しで動きがあい まいになる	異なる動きによる速さや長さ の違い モチーフの繰り返し 繰り返しで動きやイメージが 明確になる	同一の運動の繰り返しにおける 速さや長さの違い モチーフ、フレーズの繰り返し 繰り返しで動きやイメージが 発展する	単純な運動パターンの繰り返し の回数の増加
	力 性	強弱の差がない	アクセント	アクセント 漸強、漸弱	アクセントの分散 ダイナミックアクセント 拍節的アクセント

図 I - (1)



- ア 木の形を手でたどる
- イ 両腕を回旋する
- ウ 両腕を上げて下ろす
- エ 両手をフワッと回す
- オ 両腕を斜め上から下へ振る
- カ 両手を頭上で合わせる
- キ 両腕を頭上で開く
- ク 両腕を水平に振る
- ケ 両腕を斜め下から上に振る
- コ 両手で取る動作

図 I - (2)



- a 伸びる
- b 体を曲げる
- c 膝を曲げる
- d 反る
- e 体をねじる
- f 腰を振る
- g 膝を振る
- h 顔を伏せる
- i たおれる
- j 足を横に出し体重をのせる
- k すわる
- A 歩、走
- B 回る
- C ギャロップ
- D リープ
- E 自転
- F だ行
- G 転がる
- H スキップ
- I ジャンプ
- J ホップ